81．令和５年（2024 年）の正月

今年の正月の家族の集まりは都合で大晦日に行うことになった。長男長女の家族と老夫婦で計 10 名、そのうち孫４名。くじ引きやお年玉で盛り上がり、私は「越乃寒梅」でご満悦だった。が、紅白を見ない私は９時前には布団の中。子供と孫達が何時帰ったか知らなかった。

明けて元旦の午後４時過ぎ震度７の能登半島地震が起きた。大きな天災だ。翌２日午後６時前日本航空旅客機と海上保安庁航空機とが衝突し炎上した。大きな人災だ。

お屠蘇気分が吹っ飛んだ能登半島地震はマグニチュード 7.6、最大震度７という大地震。震源地は能登地方（輪島の東北東 30km 付近、深さ 16km）といい、震度７を観測した志賀町をはじめ、輪島市、珠洲市、能登町などは大きな被害を受け、今なお全貌は分かっていないという。道路を寸断されて陸の孤島と化した個所に充分な対応はできていない。この地震での政府の初動が遅かったように感じたが、様々な被害で情報入手が難しかったのかも知れない。８日現在自衛隊員 6,100 名が投入されていて救助に活躍されている。それでも寒さが増す中、被災者たちには過酷な状況が続く。10 日現在、死者 206 名、その中には災害関連死８名が含まれるという。

昔、能登半島を妻と旅行し輪島の朝市で求めたお椀は日常的に使用しているが、その朝市辺りも全滅という。悲惨なニュースも聞くようになった。何とも痛ましく可哀想である。

地震を知った時、原発も心配になった。停止中の志賀原発の1、2号機に「大きな異常はない」との発表だったが、実際には変圧器の配管が壊れ 7,000 リットルの油の漏出などがあった。また原発の揺れが一部で想定をわずかに上回ったという。志賀原発では震度５弱というが、これらの被害がどの程度の深刻さなのか分からないが、原発の恐さを想起させるものだった。

能登半島ではかつて「珠洲原発」の計画があった。1975 年に北陸電力による原発計画が持ち上がり、77 年には資源エネルギー庁が立地調査で「地盤が相当固く、原発立地には別段の支障がない」との判断を出しているのだ。その後反対運動など様々な経過を経て 03 年に原発計画は凍結された。計画地の高屋町は震源となったところに近い。もしここに原発があったら……

2 日午後 5 時 50 分頃、JAL516 便が羽田空港の C 滑走路上に着陸しようとしたところ、滑走路に進入していた海保機と衝突し、双方の機体が炎上しつくした。JAL 機の乗員乗客 379 名は奇跡的に全員機体から脱出したものの、海保機は機長を除く 5 人が死亡した。海保機は能登半島地震で救援物資を運ぶ予定だったというから悲しい巡りあわせだ。JAL 機の 379 名の脱出で当事者が負った死と隣り合わせの経験はトラウマにもなりかねないと思うと痛ましい限りだ。

多くの飛行機が飛び交う滑走路の交通整理は、二重三重に安全対策が施されている筈だ。それをすり抜けての事故は人が行う交通整理に限界があるということか。あるいは過密すぎるのか。滑走路に出る所に信号とか遮断機を設けたらと素人が考えても、それを制御するのが人間なら本質的な解決にならない。再発防止策にどのようなものがあるのだろうか。

毎日行く公園に山茶花が咲き、地域の人が植えたパンジーが咲いているが、冬の公園の花は少ない。公園から見る冬陽に輝く富士の雄姿は自然に手を合わせたくなる存在だ。空にオスプレィがいなくなり、たまに飛ぶ双発の軍用機は心なしか申し訳なさそうに静かだ。帰り道、５階建ビルを建設中の敷地のフェンスに、直径約１ｍの円盤が２ｍ起きに７枚掛けられているのを見る。順に次の文字が地図と共に描かれている。

I am Here　HAMURA　TOKYO　KANTO　JAPAN　ASIA　EARTH

一人一人を大事にする会社のようで嬉しくなる看板だ。　（2024 年 1 月 11 日）